

特集 「戦争」によせて

中 砂 明 徳

史学研究会で例会が復活してから四年目になる。今年（二〇〇九年）は四月十八日に「戦争」という共通テーマのもとに、日本史、東洋史、西洋史、考古学、二十世紀学の五人にご発表いただいた。発表者にはそれを基礎とした論考を寄稿していただき、さらに現代史の論文、考古学の研究動向に戦争関連の本の書評三点で本特集号は成り立っている。例会のコーディネーターを務めた関係で、私が今この文章を書いている。

実のところ、前近代の中国史を勉強していて、かつ平和ボケの典型たる私には、戦争というテーマは余り身近に感じられなかったのだが、この企画が持ち上がった時、そんな人間でもすぐに思い浮かんだのが故佐原真氏（一九三二—二〇〇二）の「戦争の考古学」であった。佐原氏以後の日本考古学における「戦争」研究の動向については、阪口英毅氏の的確な紹介の文章を読んでいただきたい。氏の指摘によれば、「戦争」の定義にまで言及して議論を進める研究例は稀だとのことだが、佐原氏の本（金関恕・春成秀爾編『佐原真の仕事⁴ 戦争の考古学』岩波書店、二〇〇五）を読んで私もそうした感想を抱いた。しかし、平和の希求という思いをこめた佐原氏の問題提起と強いメッセージ性は松木武彦氏（『人はなぜ戦うのか』講談社、二〇〇一）らに受け継がれただけでなく、他の学問分野にも波紋を及ぼしている。一般社会にもメッセージを発信していこうとする考古学の戦争研究の姿勢は、時代・地域を超えて広く防御施設を渉猟した千田嘉博氏の論文にも窺うことができる。

では、狭義の歴史学における戦争研究はどうなっているのか？ そう思って一般の本屋の棚を眺めると、淵原書評がその一冊を取り上げている「戦争の日本史」シリーズ二十三巻（吉川弘文館、二〇〇六—二〇〇九）が、また大学の書籍部では

歴史学研究会編の『戦争と平和の中近世史』（青木書店、二〇〇二）が目飛び込んできた。前者についてはシリーズものであるのに些か恐れをなしたのと、「戦争」を冠しながら実は江戸二百六十年がすっぽり抜けただけのふつうの時代史企画と変わらないのではないかとという先入観にとらわれ、いまだに一冊も読んでいない。そもそもこのシリーズには当今はやりの別冊がなく、版元による短い刊行のことばがあるだけで企画の具体的趣旨がはつきりしない。また、「有史以来」と自らの縄張りを確定してしまつて、考古学からの呼びかけに答えている様子がない。能書きがなくても、シリーズ全体の中から、日本史における「戦争」という問題系がおのずから浮かび上がってくるのかも知れないが、それは全巻を通読した読者に判断をゆだねたい。一方、後者は手軽なこともあつて一応読んでみた。すると、歴史学研究会ですでに何度も総合部会で戦争がテーマとして取り上げられているという。自分の無知が些か恥ずかしくもあつたが、その一方で、今回の企画はこれがいったい何番煎じになるのか分からないけれど、発表・論文執筆候補者はたくさんいるであろうと予測を立てたのである。

ところが、アテは外れた。人選が難航したわけではない。今回寄稿してくださつた方々はいずれも一線で活躍されている中堅の研究者である。しかし、予想していたほどには候補者の数が上がつてこなかつたのである。あるいは、推薦する側に「戦争ならこの人」という決め打ちがあつたのかも知れないが、これだけ戦争が盛んに取り上げられているように見える中で、この状況は少なくとも私には意外に思へた。

しかし、戦争史関連の本をいくつか漁るうちに、どうやら見かけほど戦争が盛んに論じられているわけではなく、取り上げられている分野に偏りがあるらしいことに漸く気づいたのであつた。たとえば、佐原氏が戦後五十年を契機に一九九五年に国立歴史民俗博物館で組織した共同研究「人類にとって戦いとは」の成果である五冊の論文集（東洋書林、一九九九―二〇〇二）を見ると、藤木久志、上横手雅敬、高木昭作ら私でも名前を知っているような豪華な顔ぶれが並んでいるが、東洋史や西洋史の論文がごくわずかなこともあつて、総体として歴史学の影が薄い。もちろん、組織母体が歴博なのだか

ら、考古学・人類学・民俗学に偏るのは当たり前といえはそうのだが、五冊をざっと見渡した限りでは、それらと歴史学の研究が相互に影響を与え、刺激しあっているようには見えなかった。

もっとも、他分野の研究の刺激を受けている歴史研究者もいないわけではないだろう。たとえば、佐原氏より一歳下の藤木久志氏である。氏は豊臣政権の「惣無事令」研究の後、中世・戦国の戦いの現場へと乗り出してゆく。その際に刺激となったのが、西洋法制史の山内進氏の『掠奪の法観念史』（東京大学出版会、一九九三）であったことは氏自身が『雑兵たちの戦場』（朝日新聞社、一九九五）で述べているところである。また、藤木氏が最初の惣無事令とみなす九州の停戦命令について尾下成敏論文は惣無事令と呼ぶことはできないと指摘し、私も「惣無事」という言葉がやや一人歩きしているのではないかという印象を持っているが、藤木氏はさらにこれを「平和令」と読みかえたのである。ここに藤木氏の豊臣政権観が表れているのであろうが、意識されているのはやはり西洋史のラント平和令であった（藤木『豊臣平和令と戦国社会』東京大学出版会、一九八五）。

ちなみに、西洋にはアウグスティヌス以来、現代アメリカの政治哲学者マイケル・ウォルツァー（駒村圭吾ほか訳『戦争を論ずる——正戦のモラル・リアリティ』、風行社、二〇〇八参照）にいたる正戦論の系譜があるが、山内氏はこれに注目し、『正しい戦争』という思想（勁草書房、二〇〇六）という論集を編んでいる。鈴木直志論文がとりあげる啓蒙の戦争肯定論と正戦論の系譜がどういう関係にあるのか私には理解できていないが、後者が戦争を必要悪とするのに対し、前者は悪として認めないという違いがあるらしい。ここで扱われているのは理性的な戦争肯定論であるが、氏をインスパイアしたロジェ・カイヨワの『ペローナ』（一九六三、秋枝茂夫訳『戦争論』、法政大学出版局、一九七四）は肯定論を含めて戦争を人類学的見地から扱って、いまなお異彩を放っている。

カイヨワはこの本の中で中国の代表的戦争論として、イエズス会士アミオによる『孫子』の翻訳をとりあげているが、丸橋書評が紹介するように、西洋における中国軍事史研究はもっぱら孫子と近代以降に集中してきた。それが近年になっ

て中世・近世に漸く関心が払われるようになってきた。遊牧史家ニコラ・デイ・コスモが編み、丸橋氏がとりあげた本の著者グラフの論文を含む論集 (*Military Culture in Imperial China*, Harvard U.P., 2009) もそうした動きの表れである。国制の重要構成部分としての兵制の研究は別として、戦争全般の研究が手薄なのは日本でも同じことである。

その原因の過半は中国における「尚文卑武」の伝統にある。その結果、戦争のナラティブが中国と西洋・日本では随分違った様相を呈する。ギリシアのヘロドトス、トゥキデデス、ローマのカエサル、ユダヤのヨセフスと戦争を中心とした歴史記述が西洋においては大きなウエイトを占める。だから、阿部書評が扱うペルシア戦争の受容史の通時代的な論文集というものも出現するのである。日本にも軍記物語の伝統があるし、「戦争の日本史」なる企画がゆうに成り立つのである。しかるに、中国にはそうしたジャンルが確立せず、漸く清朝になって周辺異民族に対する戦役を支配者の側から叙述する一群の「方略」が生まれる。

また、イスラーム世界については門外漢なので、戦争が歴史記述においてどのような位置を占めているのか詳らかにしないが、イスラーム史学の本 (Franz Rosenthal, *A History of Muslim Historiography*, 2nd rev. ed., E.J.Brill, 1968) の目次を見たところ戦史という項目は立っていない。戦争に対する文化のスタンスによって、歴史叙述が影響を受け、それが研究条件を制約することは否めないものであり、とりわけ前近代についてはそうである。

しかし、「戦争文化」が汎世界化した近代以後になれば、多様なアプローチが可能になる。本特集にも、中国・日本の近代スポーツと戦争のかかわりを、アメリカンフットボールの日本への導入者岡部平太の軌跡を通じて眺めた高嶋航論文、アメリカのコンピュータ開発における軍と学の複合を論じた喜多千草論文、そして『きけ わだつみのこえ』の受容史を通じて戦争観をめぐる世代間闘争を描き出す福間良明論文のユニークな三編を収めることができた。また、総動員体制によりいやおうなく戦争に関与せざるをえない個人の戦争経験や戦争観は、近代以後にして漸く本格的に論じられるテーマであり、日本でも近年研究が充実しつつある分野である (加藤陽子『戦争を読む』勁草書房、二〇〇七参照)。

しかし、個々のテーマが豊富であるだけに、それぞれの研究が成り立つ土壌が意識されにくいところがあるのではないだろうか。各国の世界大戦へのかかわり方によって齎される研究環境の相違が十分に意識されているかどうか些か疑わしい。福岡氏同様「わだつみ」をとりあげた高田里恵子氏の『学歴・階級・軍隊』（中公新書、二〇〇八）は参照系として専門のドイツを持ち出し、また鈴木氏はかつてドイツにおける戦争経験研究のプロジェクトについて紹介したことがあるが（『新しい軍事史の彼方へ？テュービンゲン大学特別研究領域「戦争経験」』、『戦略研究』第五号、二〇〇七）、ともに敗戦国であるドイツと日本における問題構成の共通点と相違点はどこにあるのか？あるいは、兵士の具体的な殺人体験のトラウマを治療する目的を持ったデーブ・グロスマン（『「戦争」の心理学 人間における戦闘のメカニズム』、安原和見訳、二見書房、二〇〇八）のような仕事が見れる、戦争に対して臨床的・対症的なアメリカの土壌（ウォルツァーの正戦論にもそうしたところがある）との彼我の違いが歴史研究にどのように反映するのか？そうした土壌の差異に意識的であることが必要だろう。

いくらかでもやることがあるように見える近現代の研究に対し、前近代において単なる戦史や兵制史を越えた戦争史研究には地域的・時代的制約が大きい。とはいっても、戦争の意味するところが小さい訳では決してない。近世以来軍事的暴力装置を独占したかに見えた国家に対して、頻発するテロが重大な挑戦状をたたきつけている。この「新しい中世」における事態の展開は暴力の本源の考察を歴史学に迫るものだろうし、前近代の歴史研究にもやるべきことはあるように思う。千田氏や阪口氏が述べるように、「戦争の考古学」も資料の残存状況に大きく制約を受けている。それでもなお戦争を問題にし、強いメッセージを発信しようとしている。であれば、歴史学にも努力の余地がありそうである。

以上、述べたような益体もない連想に駆り立てられたのも、本特集に様々な分野の論文が一同に会しているからである。これからお読みになる方も、それぞれに自由な連想を紡ぎだしていただければ幸いである。

インターネット四十歳の誕生日に

（本会常務理事）